

平成 27 年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

子どもとまちを育むアートな学び

～レッジョ・エミリア・アプローチ～

調査地：イタリア レッジョ・エミリア市

(ローリス・マラグッツィ・インターナショナル・センター)

調査日：平成 27 年 6 月 3 日

平成 28 年 2 月

一般財団法人 地域活性化センター

総務企画部 総務課 西澤 剛志

目 次

1 はじめに	P. 1
2 大町市の現況と課題	P. 1
(1) 大町市の概要	P. 1
(2) 大町市の課題	P. 2
(3) 大町市の取り組み	P. 3
3 イタリア レッジョ・エミリア市の取り組み	P. 3
(1) レッジョ・エミリア市の概要	P. 3
(2) レッジョ・エミリア・アプローチとレッジョ・チルドレンの概要	P. 4
(3) レッジョ・エミリア・アプローチの実践内容	P. 5
①創作活動ができるアトリエ	P. 5
②アトリエリスタ	P. 6
③プロジェクト学習	P. 6
④ドキュメンテーション	P. 7
⑤家族との関係・まちとの関係	P. 7
4 レッジョ・エミリア・アプローチがもたらすもの	P. 8
(1) 子どもたちの文化をまちの文化にするためのアート	P. 8
(2) 自主的に学ぶ子どもの成長	P. 8
(3) レッジョ・エミリア・アプローチはまちの誇り	P. 9
5 まとめ	P. 10
6 おわりに	P. 10

1 はじめに

2014 年 5 月、民間の研究機関である日本創生会議のいわゆる「消滅可能性都市」の発表¹が呼び水となり、東京の一極集中是正に向けた「まち・ひと・しごと創生本部」を政府は 2014 年 9 月に発足し、にわかに「地方創生」がキーワードとなった。

こうした状況の中、特に地方の自治体は、人口減少に歯止めをかけるべく移住・交流施策に力を入れ始めている。日本全体が人口減少していく中で、特に将来の地域の活力に暗い影を落とすのが、若年人口の減少、少子化である。

先述の日本創生会議の提言でも、20～39 歳の女性の数が 2040 年までに半数以下に減ると推計された自治体を、自治体機能がなくなるとして、消滅する可能性がある自治体としている。これは、子どもの大半をこの年代の女性が産んでおり、次の世代の人口を左右するためと推計している。

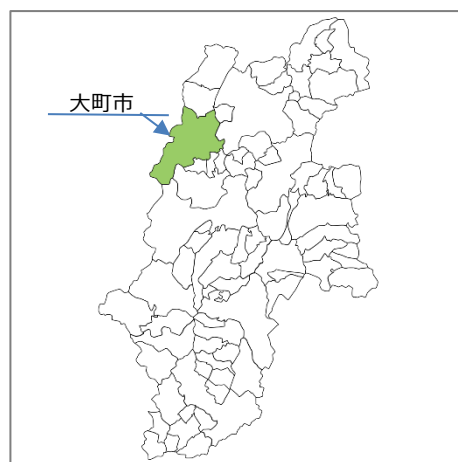
今回の地域づくり海外調査研究事業調査にあたり、もう長い間、少子化が日本の問題として指摘され続けてきている中で、私の派遣元の長野県大町市も「消滅可能性都市」に挙げられており、地域が元気になっていくためには、人口が減少していく中でも、地域の宝である子どもたちが生き生きと暮らしていくこと、また、地域を担う人材として育っていかけてくれることが必要ではないかと考えた。

その「子ども」を中心としたキーワードとして、大町市の現状や課題を整理しつつ、今後の大町市に参考となる取り組みについて、今回、イタリアのレッジョ・エミリア市を訪問した。レッジョ・エミリアは、幼児教育・芸術教育において、世界で注目されているまちのひとつで、本調査では、その概要とその取り組みを学び、市のまちづくりと関連付けて大町市において活用できる要素はないか考察したい。

2 大町市の現況と課題

(1) 大町市の概要

大町市は長野県の北西部に位置する内陸都市で、その西部一帯には 3,000m 級の北アルプスの山々が連なっている。一方、東部は標高 1,000m 級の昔ながらの里山風景が残り、山に囲まれた地形となっている。気候は、典型的な内陸性気候であり、寒暖の差が大きく湿度は低いことが特徴的で、夏の日中は比較的気温が上昇するものの朝夕は涼しい一方、冬の寒さは厳しい。降雪量については、変化に富んだ地勢の影響から市内でも主に北部と南部で地域差があらわれる。



¹日本創成会議・人口減少問題検討分科会 提言「ストップ少子化・地方元気戦略」

北アルプスをから流れ出る河川とともに山々を映す仁科三湖やダム湖があり、黒部ダム・立山黒部アルペンルートや国営アルプスあづみの公園、日本で初めて山岳をテーマとした山岳博物館、豊富な温泉など、四季を通じて山岳観光都市としての地勢を備えている。

また、歴史的にみると、古くから内陸と日本海側を結ぶ通称「塩の道」が開かれ、交易が盛んに行なわれていた。特に江戸時代になると、海産物や塩、麻等の集散地として栄えた。平安時代後期から戦国時代までは、京都と結びつきが強かった豪族の仁科氏によって治められてきたため、中央の文化を取り入れながら独自の文化を育み多くの文化的な財産・資源が残されている。

現代の市民生活においては、市民の自主的な地域づくり活動や市民生活向上を目的とした活動をサポートする「市民活動サポートセンター」に登録している団体が 140（※2015 年 8 月 28 日現在）ほど、さらに公民館や体育施設などの社会教育施設で文化・芸術・スポーツ・勉強会等の活動を行うために登録しているサークル・グループは約 800（※2015 年 9 月 7 日現在）もあり、市民活動が盛んに行なわれている。

（２）大町市の課題

このように、水資源や観光資源に恵まれ、市民活動が盛んな大町市であるが、人口は、1960 年の 41,184 人をピークに減少が続いており、2015 年 7 月 1 日現在では 28,144 人²となっている。2010 年の国勢調査では、その前の調査の 32,145 人から 29,801 人と、2,344 人減少して減少率が 7.3%となり、長野県内にある 19 市の中で最も高い減少率となった。また、先述した日本創世会議発表の「消滅可能性都市」として、2040 年までの若年女性人口の変化率がマイナス 67.0%と、こちらも県内の市で最も減少率が高い見込で発表されている。

そして、年少人口についても、国立社会保障・人口問題研究所の推計³によると、2010 年の 3,721 人から、2040 年には 1,380 人と、62.9%の減少率が見込まれており、今後もさらに減少傾向が続いていくことが予想される。

現実には、大町市内の中山間地域の 2 つの小学校では、ここ何年も年度初めの入学者が一桁台という人数が続いていることに加え、2016 年度から市内の普通高等学校 2 校が統合され新校が設置されることなど、地域の学校存続について危機が迫っているということが、少子化の実感を伴って地域にも閉塞感が広がっている。

また、文化の面を見てみると、多くの文化財や市民主体の芸術・文化活動も行われ、芸術祭などのイベントも実施されている反面、そういった多くの文化資源や素材がありながら、行政・市民の間でも共有・認識がされていない、イベントや市民活動同士の連携がないなど、それぞれがバラバラで有効活用されていないという課題を抱えており、市の創造性を高める活動として、市民と行政の共通した戦略づくりが必要となっている。

² 長野県「毎月人口異動調査」

³ 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」（平成 25 年 3 月推計）

（３）大町市の取り組み

そのような中、大町市は平成 24 年度から定住促進係を新設し、市の重点プロジェクトの一つに定住促進を位置付けて取り組みを始めた。今後も人口減少傾向が続いていくことが予想されている中、市民の活力やコミュニティの存続、地域経済や市の財政基盤等への様々な影響の懸念から、市民と行政が連携・協働し、定住促進に向けた施策を総合的かつ戦略的に展開するとして、定住促進ビジョンの策定や、大町市定住促進協議会を立ち上げて、大町市の住みやすさの情報発信や、定住支援に係る制度の整備や、セミナーやツアー等のイベントも積極的に実施している。

教育・子育ての面では、「地域の子どもは地域で育てる」として、平成 25 年度から、文部科学省の「コミュニティ・スクール」⁴の認定を受けて、地域住民が学校運営に関わって地域の子どもの教育に取り組み始めた。コミュニティ・スクールは、学校と保護者や地域住民が共に知恵を出し合い、学校運営に意見を反映させることで、一緒に協働しながら子どもたちの成長を支え「地域とともにある学校づくり」を進める仕組みで、保護者や地域住民などから構成される学校運営協議会が設けられる。

大町市では、市内 9 つの小・中学校のうち、2 つをコミュニティ・スクールとして地域住民に学校運営に関わってもらっており、ほかの市内の学校も、地域の実情をふまえながら住民と対話を重ねてコミュニティ・スクール化を進めている。

そして、芸術・文化の面では、平成 24 年度から、外部のアドバイザーを招き、地域資源を生かした芸術・文化振興によるまちづくりについても検討を進めている。これまで、多くの文化資源や素材がありながら、それぞれがバラバラで有効活用や市の創造性を高める市民活動として、市民と行政の共通した戦略づくりの仕組みがなかった中、個性ある大町市の文化を市民と行政が再認識し有効に活用できるビジョンの策定が平成 26 年度から始まっており、平成 27 年度末にはビジョンが策定される予定である。

3 イタリア レッジョ・エミリア市の取り組み

（１）レッジョ・エミリア市の概要

レッジョ・エミリア市は、イタリア共和国エミリア＝ロマーニャ州レッジョ・エミリア県の県都で、人口約 17 万 3 千人弱の基礎自治体である。

ミラノとボローニャの間、エミリア街道沿いにあり、中世の街並みと建造物による景観が美しく、イタリア国旗である三色旗「トリコロール」が生まれた場所でもあり、重要な歴史遺産、



⁴ 文部科学省「コミュニティ・スクール 学校運営協議会設置の手引」

文化遺産も点在している。

まち自体は大きくないが、パルミジャーノ・レッジャーノ（パルメザンチーズ）やバルサミコ酢を生み出す食のまちとして、また、今回の調査テーマである芸術や子どもの自主性を尊重した幼児教育の方法論「レッジョ・エミリア・アプローチ」を生み出したまちとして知られている。



（２）レッジョ・エミリア・アプローチとレッジョ・チルドレンの概要

レッジョ・エミリアには、現在、市内に 28 か所の乳児保育所（0 歳から 3 歳）と 61 か所の幼児学校（3 歳から 5 歳）がある。そのうち、乳児保育所のすべてと幼児学校のうちの 21 か所がレッジョ・エミリア・アプローチを適用している。

レッジョ・エミリア・アプローチとは、子どもたち一人ひとりの異なる意思や能力を尊重しながら、表現力やコミュニケーション能力、考える力などを養うことを目的とした教育方法論で、その手法として、主にアートを取り入れながらまちぐるみで取り組んでいるのが特徴である。

そもそも、レッジョ・エミリアの教育の起こりは、第二次世界大戦後、地域住民が戦車や軍用トラックをスクラップにして売り、ボランティアとして手づくりで幼児学校をつくったことにある。宗教色を持たずに、「自分たちで子どもたちの学びの場をつくる」という情熱と自発意思で、7 つの幼児学校・保育所が建てられた。

さらに、このように始まった幼児教育を「レッジョ・エミリア・アプローチ」と呼ばれるまで開花させたのがレッジョ・エミリア市立の乳児保育所・幼児学校の創設者の 1 人であるローリス・マラグッツィという人物だった。

マラグッツィは、「子どもたちには 100 の言葉がある。」として、子どもたちはそれぞれ、言葉、考え方、表現方法、聞き方、話し方、驚き方、愛し方、理解の仕方など 100 通りあって 100 の世界があるのに、大人や学校が 99、その可能性を奪ってしまっていると考え、子どもたちの持っているもの、子どもたちの文化を「見えるかたちで」親や住民に伝えられるようにと、アートという手法を取り入れて、子どもたちが自らの思想や感情を表現できる個人として育つことができるような教育方法論を生み出し、現在のレッジョ・エミリ

ア・アプローチを形づけた。

その後、マラグッツィの発案によって、これらの幼児教育の研究機関である「レッジョ・チルドレン」が、1994年にレッジョ・エミリア市が出資した有限会社として設立された。レッジョ・チルドレンは、現在、チーズ工場だった建物をリノベーションした「ローリス・マラグッツィ・インターナショナル・センター」（以下、「センター」という。）において、幼児教育の研究及びレッジョ・エミリア・アプローチについての展示や発表、視察受入れなどにより啓発を行っている。

（３）レッジョ・エミリア・アプローチの実践内容

レッジョ・エミリア市内で行われているレッジョ・エミリア・アプローチの実践内容について、本調査では、センターを訪問してセンター内のアトリエ責任者で教育学者のロレッタ・トランコッシ氏からお話を伺うとともに、センター内の展示やアトリエについて視察を行った。



①創作活動ができるアトリエ

レッジョ・エミリア・アプローチの特徴として、乳児保育所・幼児学校の各施設内に、教室以外に「アトリエ」という子どもたちが創作活動ができる空間を複数設けている。

このアトリエには様々な素材が用意されており、様々な葉っぱや小枝、動物の骨、貝殻、色別に分類されビンに詰められた砂などの自然素材に加えて、金属の破片やボルトナット、電気器具の部品、釘、ボタン、プラスチックの破片など、子どもたちが創作・表現活動ができるように、ありとあらゆるものが素材として準備されている。そして、これらの素材は、全て廃材などの再利用で調達しており、その多くが、市内の「レミダ」というリサイクルセンターから細かく分類されて乳児保育所・幼稚園学校に無償で届けられている。

また、レッジョ・エミリア・アプローチは「光と影」というテーマも大事にしている、暗いアトリエも設けている。暗い空間では光と影をモチーフとする表現活動が展開される。センターにも、アトリエスペースを設けていて、「光のアトリエ」として来館者が体感及び表現できる場が設けられている。光を投影して影遊びができたり、下から光が当てられるライティングテーブルの上に、セルロイドやプラスチックのモノを置いたり、OHPの上に

様々な色や形の素材を乗せるだけでも、台の上やスクリーンに不思議な光と影の造形を投影することができる。

このようなアトリエは、様々な形、色、素材のモノを使うことで、科学的な部分と創造的な部分を五感で感じながら、どのような使い方もできるスペースとして、簡単なことで色々な発見がある場所となっており、先述した子どもたちの 100 の言葉を表現しやすい環境をつくり出している。

また、センターにあるアトリエは、展覧会の場所として使われたり、レッジョ・エミリアだけでなく、他地域の小学校から大学生まで、あらゆる学生を受け入れて教室として使ったり、教師の養成講座も行っている。

②アトリエリスタ

各乳児保育所と幼児学校には、教師の他に 1 人の「アトリエリスタ」と呼ばれる芸術専門家が配置されている。このアトリエリスタは 1970 年代から市で採用していて、教師たちとは違うバックグラウンドで大きなものを与えてきた。アトリエリスタは、大学で芸術を専攻した卒業生が多く、教育の知識はないが、自由な発想で参加することで、教師と子どもの創造的活動をサポートする役割を担っている。教師と子どもが立てたプロジェクトによって、アトリエリスタはアトリエを作るのが大きな仕事と言えるので、アトリエはそれぞれ違ったものとなっている。

一方、教師も沢山持っている知識をただ伝えるのではなく、子どもたちが学ぶ・表現する環境を創るということを大事にしている。そのために教材・素材を準備している。同様にアトリエリスタも絵の描き方や造形の仕方を教えることはしない。子どもたちに教えることはせずに、どのように感じるか、どのように見えるかなどの質問を投げかけたり、子どもたちに相談をさせるようにしており、そのことによって、大人が思いもよらない創造的な展開へと広がっていく。

③プロジェクト学習

もうひとつの特徴として、「プロジェクト学習」という取り組みがある。これは、何かプロジェクトのテーマを決めて、何をしなければならないかを考えて展開していく。最初に解決策は見えてはおらず、色々な仮説と実験を繰り返しながら子どもたちの意見や反応を見て情報集して次の段階に進めていく。ひとつのテーマを、長い場合は数カ月取り組むものもある。

テーマについては教師が提案し子どもたちが話し合って進める。「何を作るのか」「どのように作るのか」「個人でつくるのか、みんなでつくるのか」などを小グループで話し合いながら進めていく。子どもたちは、この話し合って進めるプロジェクト学習を通して、創造性に加えて考えを主張する自主性や友だちの意見を聞く協調性、自分たち自身で目的を見つけ出す探究力などが育っていく。

そして、プロジェクト学習は施設の中だけではない。あるプロジェクトでは、「子どもた

ちがまちを知る」ためにまちの古い通りへ出かけていくという設定で、図書館などの公的な場所だけでなく、映画館や商店などプライベートな空間にも入って行って、五感を使ってまちを感じるように取り組んでいる。

例えば、靴屋に訪れた子どもたちは、奥まったところにある靴屋に、「目立っていない」ことを指摘して、店主と相談して、店を見つけてもらうためのサインとして、子どもたちがデザインした靴を粘土で作ってあげたり、立て看板のデザイン・配置も一緒に考え、「靴屋さんの新しい表現」といったタイトルをお店につけてあげたという。その他にも、まちの公園の木にアクセサリを作ってあげようとか、市内の劇場では、幕を子どもたちに作って欲しいと頼んでデザインをしてもらったりもしている。

④ドキュメンテーション

子どもたちの活動は、プロジェクト学習を中心に展開されていくが、その日々の活動プロセスは、教師たちによって「ドキュメンテーション」と呼ばれる記録に集約される。子どもたちが活動しているとき、教師やアトリエリスタは「観察すること」を基本としている。良いと思って準備した様々な素材が、子どもたちの活動にマッチしているか、子どもたちがどう学んでいるかを観察する。また、子どもたちの活動が行き詰っているときに、まずは観察して、とにかくじっと待つことを大事にしている。声を掛ける時は、「こうやるんだよ。」ではなく、「どうするの?」「大丈夫?」などと聞いて声を掛ける。そうすることによって、教師たちも学習には時間がかかることを学んでいくことができる。

ドキュメンテーションは、子どもや教師の会話や活動の様子を、録音、写真、動画に加えて絵とメモで記録していく。プロセスを記録することで、子どもたちの思考・成長が可視化できる。ドキュメンテーションは、教師同士が見せ合って発達研究のために展開する基礎資料であり、保護者にも共有されて協働する基礎資料としても活用される。また、パネルなどにして学校の壁に掲示するなどして地域住民にも見える形で展開されている。さらに、教師と子どもたちが議論して、子どもたちが自分の活動を振り返る資料としても活用されている。子どもたち自身もドキュメンテーションをつくり、自分が何を学んだかを記録することも行っている。

作り上げた作品などの最後が重要ではなく、学んでいるプロセスが重要ということと、地域や保護者にも見える形で掲示されることで、より広いコミュニケーションが生まれる仕組みになっている。

⑤家族との関係・まちとの関係

レッジョ・エミリア・アプローチでは、「子どもも保育者も保護者も対等」という理念がある。保護者とのクラスミーティングが年間4～5回行われていたり、子どもの創作活動の道具を保護者が作ってあげたり、親子で一緒に作るワークショップを実施したりするなど、大人が子どもに“教える”のではなく、協働して活動に参加することが重視されており、プロジェクト学習でもドキュメンテーションでも、この考えが生かされている。

また、プロジェクト学習からもわかるように、子どもたちはまちに大きくかかわっている。毎年5月になると、幼児教育とゴミのリサイクルを融合させたイベントで、市、学校、市民、企業などが推進して、廃材で作った子どもたちの作品がまち中にあふれる「レミダ・デー」が行われている。

一方で、こういった様々な活動や、アトリエリスタという専門家を雇うということは、現実的にはコストがかかってしまう。実際に、レッジョ・エミリアでは、乳児保育所・幼児学校にかかるコストの30%は保護者が負担していて、70%は市の税金で賄っている。ただし、レッジョ・エミリア・アプローチの考え方は、教育にはお金がかかるので、そのことを地域住民に見えるように、家族に子どもいなくて税金を納めている人たちにも、誇りに思えるように「返してあげる」ということを考えて、レッジョ・エミリア市のシステムを構築している。

4 レッジョ・エミリア・アプローチがもたらすもの

(1) 子どもたちの文化をまちの文化にするためのアート

トランコッシ氏は、レッジョ・エミリア・アプローチの取り組みで非常に重要なことは、戦後に地域住民の自発意思からつくられた乳児保育所と幼児学校の運営を、1963年から市が引き継いだことによる市民と市との「自発意思のつながり・絆」だとお話ししてくださった。このことは、保護者と学校だけでなく、市民と学校との繋がりがあるということで、コミュニティとして子どものために何をしているか。せまい意味での幼児教育ということではなく、市民と市と子どもとの関わりを考えなければならないことだという。

レッジョ・エミリアにおいては、子どもたちの教育をどういう意識で捉えているかということとは「文化」と「まちのアイデンティティ」とをつなげて考えていて、これは、子どもたち文化とまちの文化を作っていく必要があると創始者のマラグッツィは考えたという。

先述した教育のコストの部分にも関わって、子どもたちがどう理解したか、感じたかをまちに伝える、戻すということをアプローチの根幹として、子どもたちの持っているもの、子どもたちの文化を見えるかたちで市民にも伝えられるように、そのための手法としてアートを活用することを取り入れた。アートを自分の手で作る、表現するという喜びは、子どもだけでなく全ての人を持っているもので、その喜びを共有することで、まちの文化を形成していくことにつながっていく。

(2) 自主的に学ぶ子どもの成長

レッジョ・エミリア・アプローチは、手法としてアートを活用していくシステムを構築しているが、最初のコンセプトとして、とにかく子どもたちのことを考えて、乳幼児がどういう考えを持っているかを明確にすることを出発としていて、教材などを考える時にも、そのことを根幹として、子どもたちの視点で準備を進めていく。

レッジョ・エミリア・アプローチでは、乳幼児期の小さな子どもは、特に最初の18か月

の中で、人生の重要な基本的なことの大半(例えば歩くことや話すことや外との関係など)を学ぶが、これは、普通は自分で自然と学ぶので、この時に必要なのは、教えるのではなくて、「やることをサポートしてあげられること」だと考えている。

小さい場合の方が、教師の役割は沢山あって、多くのことを教えると思われがちだが、子どもたちが自分で学んでいくのをやりやすいような環境をつくり、自分から学んでいくことを育てることが大事だという考えのもと、アトリエの素材の準備や、プロジェクト学習の進め方、子どもたちの考えを理解するためのドキュメンテーションの記録などに反映されている。

トランコッシ氏は、この「学習する場をつくること」、その準備が一番大変で、子どもたちが来る前に、子どもたちがどのような反応をするかも考えながら、多くの素材、色、形のモノを準備して子どもたちに「提案」するのだという。その際、プログラムを作っただけではいけない、知識をつくっただけではいけない、でも放っておけばいいということでもない、ということで、毎日違うものを作っておいて、子どもたちを観察していく。子どもたちは、環境が整っていて興味を引くものがあると、長時間集中して退屈して騒いだりすることはないという。

レッジョ・エミリア・アプローチには、教科書のような“今日はここまで”といった教育プログラムはなく、様々な方向性のものを一緒に与えて、それぞれの子どもたちが違う方向で吸収することを大事にしている。

子どもたちの理解の仕方も予測がつかないからこそ、多くの可能性を排除しない学習の場づくりをすることで、自主的に学ぶ子どもたちの成長を手助けしているのではないだろうか。

(3) レッジョ・エミリア・アプローチはまちの誇り

子どもたちの可能性を狭めないためにアートの手法を活用して学びの場をつくり、その場をつくるために、必要なシステムの構築や人員の確保、素材の調達など、地域住民がその場づくりを支えているレッジョ・エミリアの取り組みは、その学ぶ場の中で、子どもたちがまちを知るプロジェクト学習や、市民全員が共有できるドキュメンテーションで、学習の場で子どもたちがどう学んで成長しているかの表現を見ることができる。また、センターのアトリエも、市民がそのアトリエを体験することによって、レッジョ・エミリアの子どもたちの取り組みを知ることができるようになっていて、これらのことは、大人たち誇りつながっている。

また、子どもたちの方も、まちを知るプロジェクト学習や、地域住民と関わる機会が沢山あったり、自分の作品などがまちに多くあることで、まちへの愛着につながっている。

実際、レッジョ・エミリア・アプローチを受けていた子どもたちの多くは、大きくなってアトリエリストや教師を目指すなど、レッジョ・エミリアの子どもたちのために何かしたいと考える人が多いそうだ。

5 まとめ

レッジョ・エミリアの取り組みは、まずは、子どもたちの学びを第一に考えていながら、その教育は狭い意味ではなく、その学びを発信することで、まちのアイデンティティや文化形成につなげている。

子どもたちが地域づくり、文化発信の主役と捉え、その子どもたちの可能性を狭めない、子どもたちの潜在能力を明白にするための環境づくりとして、芸術・文化、アート教育の手法を取り入れている。そして、一歩通行ではなく、子どもとまちが相互に助け合い、子どもたちの文化・発信をどう聞か、見える化をして子どもたちと地域をつなぐ手法としてもアートを活用している。

それによって、子どもたちが発信している文化がまちの文化を形成していき、子ども、大人の両方がまちへの愛着や誇り、アイデンティティ形成につながっていく循環ができていることが本調査で学ぶことができた。

大町市では、文化資源の活用ビジョンの策定や、芸術祭などのイベントの実施など芸術・文化に関する盛り上がりを見せてきているが、今回の調査をふまえて、芸術家による作品を楽しんだり、地域にある文化を守っていくに加えて、教育ツールとしての芸術・文化や、コミュニケーションツールとしての芸術・文化という視点での取り組みが必要なのではないかと考えた。

レッジョ・エミリア・アプローチは乳幼児教育の方法論であるので、学校教育とは異なる部分もあると思うが、地域住民が学校運営に携わるコミュニティ・スクールは、「地域として子どもたちに何ができるか。」を考え実践する制度なので、ツールとしての芸術・文化を取り入れるチャンスがあるように見える。コミュニティ・スクールと芸術・文化振興を連携させていき、「子どもの手によるもの」を地域に広げていく、見えるようにしていくことで、子ども、大人、まちのかかわりが強くなると考えられる。

教育は教育、福祉は福祉、芸術は芸術ではなく、それぞれの課題や別々の分野をつなぐツールとして活用していくことができるのではないだろうか。

6 おわりに

トランコッシ氏は、子どもたちについて「結局、我々も自分自身が学校などで学んできたものがあるけれど、もしかしたら自分の限られた経験は過去のもので、良いものかわからない。でも自覚は難しい。いつも子どもたちから学んでいく。意外とそのことに気が付いていないのではないか。」と話してくださった。「困ったときは子どもたちに聞く。」「子どもたちは複雑なことも意外とわかっているから助けてくれる。」地域づくりのヒントの前に、私自身が親になって間もないことから、自身のこれからの子育てに身に染みた言葉となった。

また、大町市の現状と課題をお伝えした際、「創始者のマラグッツィも同じ課題意識を持っていて、アートによって子どもたちの持っているものをまちへ見えるかたちで伝えたか

った。」と話してくださって、大町市のこれからの文化の形成・共有について道筋を示していただいたと感ずることができた。

最後に、今回の調査にあたり、快く視察を受け入れていただいた、レッジョ・チルドレンのロレッタ・トランコッシ氏及びローリス・マラグッツィ・インターナショナル・センターの職員の皆様、そして、視察地と日程調整にもご尽力いただいた通訳の大島悦子氏に心から感謝を申し上げ、本報告書の結びとさせていただきます。

【参考文献・資料】

- ・『子どもたちの100の言葉 レッジョ・エミリアの幼児実践記録』
／著：レッジョ・チルドレン、編集：ワタリウム美術館、翻訳：田辺 敬子 他
- ・『レッジョ・エミリア市の自治体の幼児学校と乳児保育所の指針』
／著：レッジョ・チルドレン、翻訳：森 眞理
- ・「ストップ少子化・地方元気戦略」／日本創成会議・人口減少問題検討分科会
- ・「日本の地域別将来推計人口」（平成25年3月推計）／国立社会保障・人口問題研究所
- ・「毎月人口異動調査」／長野県
- ・「大町市第4次総合計画」／長野県大町市
- ・「大町市定住促進ビジョン」（平成24年度～平成28年度）／長野県大町市